

# 忙 申 閑

2023年を迎えた。

3年にわたる新型コロナウイルス感染症流行の波の中、2022年2月、ロシアによるウクライナ侵攻が起こった。コロナ禍で生活様式の変容を余儀なくされ、心身ともに疲弊しているところへ飛び込んだ報せに、世界中に衝撃が走った。さらに、円高や物価の高騰など経済的な面でも生活に大きく影を落としている。いまだ“虎口を脱した”とは言えない状況だ。診療を含め、烏兔忽忽と日々生活しながら、できることやなすべきことを懊悩している。

ウクライナの民話や童話に触れる機会が増えた。書店や図書館で特集されたり、SNSで取り上げられているからだろう。絵本コーディネーター・東條知美氏の

Twitterや、絵本ナビ編集長・磯崎園子氏の記事から、ロングセラー絵本「てぶくろ」がウクライナの民話として紹介され、注目を集めていることを知った。日本では1965年11月、エウゲーニー・M・ラチョフ（以下ラチョフ）絵、うちだりさこ訳、福音館書店が発売した。

雪が降る森の中。

“おじいさんがあるいていました。” “おじいさんは あるいてるうちに、てぶくろを かたほう おとして、そのままいつてしまいました。”

ぽつんと落ちていた片方だけの暖かそうな手袋。最初に見つけたのはねずみ。中へもぐりこんで、言うのです。

「ここで くらすことに するわ」

# うさぎと手袋

広報委員 大川 記羊美

それに続いて、かえる、うさぎ、きつね、おおかみ、いのししが、「わたしもいれて」「ほくもいれて」と次々にやってきて手袋の中で暮らす物語だ。最後には大きなくまがやってきて、いまにもはじけそうな手袋の中へ。さらには落とし主のおじいさんまで戻ってくる。

登場する動物達は民族衣装を着ている。かつて作者ラチョフは、インタビューで「民族性や人間性を民族衣装で表現したかった」と述べている。

そういえば、幼いころに読んだ記憶がある。実際、「ウクライナとは知らなかった」と反響が大きかったそうだ。いろんな動物が手袋に入ることは共生を想起させ、平和や生命について考える端緒になった。

ラチョフは、1906年シベリアのトムスクで生まれ、1997年モスクワで没した、ロシアの絵本作家だ。

ウクライナは、ソ連崩壊により、1991年8月武力衝突のない無欠の独立を達成したが、2014年クリミア併合より関係が緊張。そして、今回の侵攻が起こったが、古くより、人々の間には密接な交流があったことが想像できる。

ラチョフの別の作品に「うさぎのいえ」がある。ロシア民話だ。きつねに家を奪われたうさぎが、家を取り戻す物語である。

今年の干支はうさぎ。うさぎののぼり坂、よろしく、物事が滞りなく順調に進捗することを祈念する。良いをもっと積極的に受け止め、生かしていく1年に！